

毎月11日掲載

# 防災・減災のページ

## 第87回ワークショップ @東松島・矢本二中

### むすび塾

参加者は語り合いに先立ち、住民や学生ら約120人とともに震災伝承をテーマに同中体育館で開かれたワークショップにも臨んだ。

中学生たちはワークショップを振り返り、「小学生在震災時に避難所運営を手伝ったと聞き、自分たちにもできると感じた」といろいろな世代の人と話し、新しい視点で震災を考えた。「意見を述べた。東日本大震災で学区の沿岸部が津波被害を受け、校舎1階などが浸水した同中は、防災教育に積極的に取り組んでいる。3年阿部航大さん(14)は「震災体験のない他県出身の学生と話し、自分たちの防災意識の強さと学習の成果を実感し、励みになった」と感想を語った。

震災時は就学前だったため当時の記憶は曖昧な部分もあるという。3年石川樹さん(14)は「怖かったことは覚えていない。忘れたら語り継がない。震災についてもっと知らないといけない」と力を込めた。

2年後藤藤日菜子さん(13)は将来を見据え、「震災後に生まれた子に伝えたい。次に起

# 話すことから始めよう



中学生が初めて参加して震災伝承について語り合った  
=3月11日、東松島市の矢本二中

### 中学生が初参加、教訓伝承考える

河北新報社は3月11日、通算87回目の防災・減災ワークショップむすび塾を東松島市の矢本二中で開いた。同中の生徒4人が中学生として初めて参加し、東日本大震災の語り部活動をしている高校生と短大生、阪神・淡路大震災の被災地で災害学習に取り組み兵庫県舞子高環境防災科の生徒とともに教訓伝承について意見を交わした。若い世代が語り継ぐことの意義を確認し、伝承の担い手として決意を新たにしていた。

### ■むすび塾に参加して



●下の世代に話す 東日本大震災が起きてしまったことは変えられない。私たちができるのは今後の災害備え、被災地以外の人たちや自分より下の世代に震災のことを伝えていくことだ。犠牲や被害を少しでも減らす取り組みを進めたい。  
=矢本二中2年・後藤藤日菜子さん(13)



●SNS活用検討 震災発生直時は幼稚園児だったのではっきりとした記憶はない。思い出したくないという気持ちもあったが、もしも震災を学んでいく必要は感じていた。体験を話したり、SNSを使ったりして一歩ずつ行動していきたい。  
=矢本二中3年・山田爽さん(14)



●学びを深めたい ワークショップで被災体験者の話を聞き、子どもでも避難所で役に立つことを学んだ。学校の防災活動に3年間関わってきたが、災害については知れば知るほどさらに学ぶ重要性を感じる。不安はあるができることから取り組む。  
=矢本二中3年・石川樹さん(14)



●未熟な自分反省 友だちと話していても震災は話にならない。自分自身も目の前のことを優先してしまい、知識を得る機会を逃がしてしまっている。今回、むすび塾に参加して、やりたいことが、まだまだできていない未熟さを感じた。  
=矢本二中3年・阿部航大さん(14)



●伝え方が課題に 震災を経験した人の声を直接聞くことができて、参加して良かった。経験していない自分がどう伝えるかが課題。関西で語り合える場所をつくる活動に関わり、いろいろな人の話を聞いて防災に役立てたい。  
=広島大1年・志方有紀さん(18)



●話聞くことが重要 震災伝承は自分の体験だけでなく、他の人の経験を伝えることも大事だ。若い人の場合は直接経験していないか否かより、人の話を聞くことが重要。話せる機会をつくり、経験や思いを共有できれば防災意識の向上につながる。  
=聖和学園短大2年・相沢朱音さん(19)



●話すことが大事 熊本地震を経験した小学生の防災キャンプで語り部をした際、児童が当時の思いを打ち明けてくれた。自分の話が下の世代や他地域の人の助けになると感じた。風化を防ぎ震災を伝えたいという思いを大切に活動が続けた。  
=気仙沼高3年・佐藤菜摘さん(17)

### 防災集会&ワークショップ

### 普段の心構え 重要さ確認

矢本二中では11日、むすび塾に先立ち、同校の防災集会を開催し、同中コミュニティ・スクール学校運営協議会が主催した。

ワークショップは「3・11みやぎ鎮魂の日 震災を語り継ぐ」をテーマに、同中コミュニティ・スクール学校運営協議会が主催した。

ワークショップは「3・11みやぎ鎮魂の日 震災を語り継ぐ」をテーマに、同中コミュニティ・スクール学校運営協議会が主催した。



●むすび塾に先立って開催されたワークショップで車座になり討論する参加者●討論後、壇上で決意表明する東北大生  
=3月11日、東松島市の矢本二中



ワークショップ後、東北大生たちは壇上に並び、「教員になって地域住民の方々と一緒に避難所運営を考えていきたい」「災害時は日ごろの取り組みの成果が問われる。教師として日々防災を学ぶ気持ちが大事だと伝えたい」と決意表明した。

11日超の津波襲う 住民含め670人避難

東日本大震災で東松島市は震度6強の揺れを記録した。10日を超える津波が野蒜地区など沿岸部を襲い、関連死を含め1109人が亡くなった。全半壊した家屋は1万1077棟に上り、市内全世帯の73%を占めた。市東部にある矢本二中は海岸から約3キロ離れていた

が、近くを流れる定川の堤防が決壊するなど地震発生から1週間たっても水が引かない状態が続いたものの、10日以後、学校再開に向けた準備を進めて3月30日には卒業式などを実施。4月半ばにかけて、学校業務を順次再開した。

震災を教訓に、同中では月11日を中心に、災害への対応を学ぶ各種防災プログラムに取り組んでいる。

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。

次回むすび塾は21日、名取市で開催します。

●専門家から

題が明確化し解決に向け自ら行動した。防災教育は生徒が能動的に関わるべき成果に結びつく。

学区沿岸部や学校は視察者が訪れ、命の大切さを伝える場になっている。一方、震災前は見過ごされてきた津波の碑もあり、教訓を伝える重要性を感じる。

防災教育は命や生き方を考える、いじめなど学校現場の課題を乗り越える力にも地域学習のきっかけにもなる。生徒には震災伝承や他

元石巻西高校長 斎藤 幸男さん(64)

●中学生の力 大人顔負け

震災発生直時に務めていた石巻西高で避難所運営を体験した立場からいえるのは、少し荷が重いだろう。子ども、特に中学生の存在は運営にとって大事だ。避難所内で役割を担ってもらい、自分たちが役に立つ存在だと分かると、率先して水も運ぶし、トイレ掃除もしてくれるし、大人顔負けの力を発揮してくれる。震災を語り継いでいく上でも、震災の語り部たちから次代を担う中学生たちへ命の大切さや被災した思いなどが引き継がれた。さらに中学生から次の世代へとつながっていく。震災は風化せずに語り継がれていくだろう。



矢本二中安全主幹教諭 現宮城県大郷中教頭=鈴木 国也さん(51)

●主体的な行動に手応え

矢本二中で防災教育を担当して4年、予告なしの避難訓練など独自の実践を続ける。生徒が主体的に行動する姿に手応えを感じている。

月命日の毎月11日は朝の会で震災や防災をテーマに学習や意見発表を行った。3年3回のショート避難訓練は生徒が設定や点検を担ってきたことを後輩に伝え、当、当事者になることで課題

